

提出日：2021年2月19日

川上奨学金 報告書

1 調査・研究結果概要

1-1 研究方法

本研究では1990年代以降の代表的な6つの凶悪事件（東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件・神戸連続児童殺傷事件・池田小事件・秋葉原通り魔事件・相模原障害者施設殺傷事件・登戸無差別殺傷事件）を研究の対象としている。

朝日新聞・読売新聞それぞれで対象事件に関する語句(事件名・加害者名)を含む記事を収集した。事件ごと新聞社別に記事を収集し、テキストエディタを用いて分析可能な形に加工を行った。データベースは朝日新聞には聞蔵IIビジュアル、読売新聞にはヨミダス歴史館を用いた。

その後、計量テキスト分析のアプローチから、メディア上でどのような話題やキーワードに注目がなされたのかについての分析を行った。日本語テキスト定量的解析ツールであるKH Coderを用い、対応分析・共起ネットワーク分析・階層クラスター分析・頻度分析などの分析を行った。

次に、事件ごとにどのような語られ方の特徴があるかを明らかにするために、新聞社を統合したテキストデータを事件ごとのフレームに分け、同様に5つの分析を行った。

1-2 研究結果

分析の結果、6つの凶悪事件において新聞社による報道傾向の差異は見られなかった。また、6つの事件に共通するステレオタイプングとして、①事件の概要 ②裁判の結果 ③犯人の精神障害の有無とスティグマ化が代表的なフレームとして現れ、そこに各事件の特徴に応じて加害者・被害者の属性などへの言及がなされながら、④実名報道、⑤家族関係への言及、⑥犯人の趣味・嗜好性などのフレームが登場することが見いだされた。

また本研究で取り上げた6事件は、一部例外を除き、いずれも精神鑑定の結果犯人に責任能力があることが認められているが、精神障害に関する報道が数多くなされていた。これらの結果から、鑑定結果の如何に関わらず、凶悪事件報道において、精神障害はステレオタイプングに組み込まれていることが伺える。しかし、先行研究を見る限り、「精神障害」という広義の意味を持つ語句を扱ううえで誤解を招かないよう注意することが警告されており、この報道傾向は安易に凶悪犯罪と精神障害の関連性の強さを大衆に印象付け、スティグマ化を生じさせる危険性があると考えられる。

実名報道に関しては、加害者側の実名は犯人が未成年者の場合を除き必ず報道されている。対して被害者側の実名は出現する事件とそうでない事件があり、一貫性が見いだせな

かった。先行研究を見るならば、実名報道に関して 1980 年代から 90 年代まで報道被害が相次いで起きたことと、それによるメディアに対する信用の失墜が指摘されている。被害者・犠牲者側の実名報道に関する被害もこれに含まれており、こうした議論の影響である可能性が考えられる。「家族」に関連するフレームとしては、特に頻度分析の結果から「母親」という語への注目が見いだされた。

また戦後の報道からは犯人の趣味嗜好を報じる傾向が強くなっていることが先行研究から指摘されていた一方で、本研究の量的調査の結果からはその傾向を明瞭に見いだすことはできなかった。その理由として、先述した①～③フレームに基づいたステレオタイプな報道量はその傾向を上回る割合で増加していることが考えられる。

2 奨学金使途

- ・論文執筆・打合せのための通信費
- ・文献費